

F-25 家事労働の變動要因に関する研究(第2報) —女中さんと家事—
東京学芸大 ○大森和子 加藤悦

目的 研究の目的は、第1報と同じである。第1報で述べたように、大正末期・昭和初期の頃の東京における中流家庭(中流の上・中)は、殊人どの家庭が女中さんと雇っており、主婦と女中さんとして家事を処理していた。第2報では、当時女中さんの待遇や労働条件はどのようであったかを調べ、この時代の家庭生活について、家事労働に視点をおいて考察する。

方法 第1報にあげた調査対象世帯のうち、約半数の家庭の主婦を訪問し、家事労働や特に女中さんに関する種々の問題について、聞きとり調査を行った。

結果 調査対象の家庭にいた女中さんの出身地は、関東地区の農村が多い。女中さんを雇う場合、親せきや知人からの紹介によることが多く、桂庵という周旋屋を通して雇ったという例は非常に少ない。女中さんに対する待遇としては、食事は家族と食卓が別であった、すなわち女中さんは別の膳を使ったという世帯が71%と多く、食事の内容について、家族と女中さんとは、いくらからかがあったかという点に對し、ちがいがなかったとするもの69%、ちがいがあったというもの22%、あとは無答であった。女中べやがあった家庭は93%である。女中さんの休みは盆と正月が46%、月1回程度が36%である。日帯着は、おしきせとしてあげたというもの89%、ちり紙、せっけんなどの日用品は家族と一つしよに使用させたのは77%であった。主婦は女中さんに裁縫を教えたり、行儀作法を教えたりした家庭が大部分である。